

## 専門家によるコメント

(1) <sup>なかい</sup> <sup>ひとし</sup> 中井 均 滋賀県立大学人間文化学部教授

専門：日本城郭史

- 今回、発見された遺構は、天正期の天守台東側に付属する小天守台の石垣である。
- 小天守台石垣の構造は昨年度発見された天守台と同じく自然石を積み上げる野面積みであった。このことから今回検出された石垣が天守と同時代のものであり、連結している構造から小天守台であることはまちがいない。また、構築技術が天正期の豊臣秀吉の城郭に見られる築城技術であることを示している。
- 日本の天守には天守単独で築かれる独立型、天守に付櫓を持つ複合型、大天守と小天守が櫓や塀で結ばれる連結型、大天守と複数の小天守が多間櫓で結ばれる連立型がある。安土城は天守台の構造から独立型と見られる。小天守の存在を示す最古の記録は天正10年(1582)の近江坂本城の事例であるが、現存しておらずその構造は不明である。今回の天正期の小天守台は連結型であり、今のところ確認できる最古の事例として位置付けできる。こうした連結型天守としては名古屋城、熊本城、八代城などがあるが、今回検出された小天守台は連結型天守の始祖として位置付けられるものであり、日本城郭史を考えるうえで重要な発見である。
- 天正期の駿府城において小天守台が発見されたことにより、発掘調査の成果が徳川家康の家臣である松平家忠の日記である『家忠日記』に記された時期と内容が一致する可能性が高まった。家忠は家康の築城などの土木を数多く担当している家臣である。駿府築城にあたっては天守の石垣を築いた記述が認められる。これは天正18年(1590)の中村一氏駿府入城以前のことであり、天正13年(1585)の家康駿河入国後の天正15～17年(1587～89)頃の工事に伴うものと見られる。
- 今回発見された小天守台石垣や大天守台石垣には巨大な石材が用いられ、その石を積み上げる技術も天正11年(1583)に秀吉が築いた大坂城の本丸詰段で検出された

石垣をはるかにしのぐ見事な技術である。家康がこのような石垣を築くことは、家康が秀吉に家臣として従っていた当時の体制から考えても出来ないし、技術的にも無理である。家康の駿府築城に関しては秀吉が大きく関与していたものと考えられる。

- 今回検出された石垣は天正期に家康が単独で築いたものとして単純に評価することはできない。そこには様々な政治的な駆け引きや影響があったものと考えられる。今後、検出された石垣と出土した凹面金箔瓦などの考古学的資料とともに文献史料などを総合的に分析することによって評価していかねばならない。そのためには考古学や文献史学の研究者による議論を進めていく必要がある。

- やまもとひろふみ  
(2) 山本博文 東京大学史料編纂所教授／静岡市歴史文化施設建設アドバイザー  
専門：日本近世史

- 発掘調査により、文献史料（『家忠日記』）の記述内容と一致する可能性が高い発見があったことは、興味深い。
- 発見された天正期駿府城の天守（台）や小天守（台）が築かれたと考えられる16世紀後半は、豊臣秀吉が天下統一に向けて、関東や奥羽の平定に向けた動きを強めていた時期である。その中で、関東の北条氏との関係においては、既に豊臣秀吉に臣従していた駿府城主・徳川家康の役割は重要であった。
- 築城者やその背景について、今の段階ではいくつかの仮説が考えられるが、豊臣政権の東国政策における駿府城の位置づけを意識しながら、今後、文献史学と考古学のそれぞれの立場から、調査研究を深めていくことが望ましい。
- このたびの天守台の発掘調査によって、駿府城は、慶長期の大御所家康の城であることに加えて、天正期の豊臣政権の城として新たな光が当たることとなった。この天正期駿府城の築城に関する調査研究は、今後、建設される（仮称）静岡市歴史文化施設を核として行われる歴史研究の重要なテーマの一つであると言える。今後の進展に期待したい。